

人生の旅路を

〔聖書〕創世記 12 章 1～9 節

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に 行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／ 祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは 呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共に カナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モシの櫨の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに 現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

〔序〕世界で一番多くの人から尊敬されている人物

世界中で長い年月にわたって一番読まれている書物は聖書でしょう。日本でも実に多くの人が聖書を持っています。聖書は旧約聖書と新約聖書からなっていますが、多くの方は 先ず新約聖書を開くでしょう。その目に飛び込んでくる最初の言葉が第一行の「アブラハムの子のダビデの子、イエス・キリストの系図」。イエス・キリストはアブラハムの子孫のダビデ の家系に誕生されたという宣言です。

アブラハムはユダヤ民族の始祖となった人物で、旧約聖書の最初の書創世記の 11 章から 25 章にかけて、どの人物よりも詳しくその生涯が記述されています。旧約聖書のみを信じるユダヤ教徒にとっても、当然信仰の父として重んじられています。また紀元6世紀に始まったイスラム教でも同じように信仰の父と仰がれていますから、アブラハムは世界中で一番多く の人から尊敬されている人物と言えましょう。

彼は紀元前 1850 年から 1650 年位昔の人物で、文明の発祥地メソポタミア地方のユーフラ テス川流域ウルに住んでいました。父親のテラの代までは、他の神々を拝んでいました。多分月を神として拝んでいたのでしょう(ヨシュア記24:2)。テラは、ウルを捨ててカナン地方目指して、息子のアブラハム夫婦を連れて移動を開始しました。しかしユーフラテス川 上流のハラシマまで来ると、そこに留まってしまいました。アブラハムは75才になって神さま の声を聞きます。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」。そこで彼は妻のサライと甥のロトとハラシマで彼の家で働くようななった人たちと、蓄えた 全財産を携えて、父がかつて目指していたカナン地方へ向って、出発したのです。

カナン地方の中心シケムに到着すると、神さまが再び現れておっしゃいました。「あなたの子孫にこの地を与える」。アブラハムは祭壇を築いて礼拝しました。神さまは彼を南の端のネゲブ地方までカナンの全土を歩かせて、約束の地をお示しになりました。アブラハムは行く先々で祭壇を築き、礼拝を捧げました。そしてこの地がずっと後になって、イスラエルの民が神さまから賜った嗣業の地になったのです。

聖書教育では、6月から9月にかけて四ヶ月にわたり創世記を学びますが、今日から6回は、アブラハムについてです。アブラハムは父からアブラムという名前をもらいました。ですから75才の今日の箇所では、未だアブラムと呼ばれています。99才になった17章で、神さまからアブラハムという名前を頂きました。しかし私は混乱を避けて、最初からアブラハムで通すことにします。

[1] アブラハムの出発

新約聖書のヘブライ人への手紙には、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」と、旧約聖書に出てくる信仰者の模範が記されています。そしてアブラハムについてはこう述べています。「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」(ヘブライ11:8)。

そもそもアブラハムの父のテラが、カナン地方に行くのだと言って、一族を連れて文明の発祥地メソポタミア地方のウルを出発したのです。でもテラはハランで途中下車してしまいました(11:31)。ですから息子のアブラハムの心には、このままハランに留まっていた方がいいのだろうか。父の遺志を継いで、カナン地方に向わなければならないという思いが、年令が進むにつれて、強くなってきたのでしょうか。

しかし「出て行く」とは、住み慣れた土地から出て行くことです。毎日の生活を支障なく送れるように便宜をはかり守ってくれる親族や、相談相手になって支えてくれる気心の知れた仲間を捨てることです。気候風土や風俗習慣や考え方の違う人たちが暮している土地で、よそ者、新参者として暮すようになるのです。何が起こるか絶えず緊張して毎日を送ることになるでしょう。気楽な暮らしを捨て、未知の世界に向うことでした。

その上、カナン地方とはいうものの、新約聖書では「行先も知らずに」と述べられています。「そこがどんな土地で、どのように暮していけるのか」とアブラハムの仲間たちは心配して繰り返し尋ねたことでしょう。それに対してはっきり答えられないアブラハムを、「ほれ、そのように行く先の地をよく知らないのに出て行くのか」と、こぞって引き止めたに違いありません。ところがアブラハムは、それまでに蓄えた財産をすべて携えて、出て行ったのでした。

私は2005年の1月に約10年暮したシンガポールから日本に帰って来た時のことを思い出します。私はシンガポール政府が、なかなか発行しない永住権を私にはすんなりと出してくれましたので、再び戻る積もりで本や荷物の一部を置いて来ました。ましてやアブラハムのような状況に立たさ

れたならば、大抵の人はハランにも半分位財産を置いて出立するのではないのでしょうか。ところが彼は、住む地を示されないのに財産全部を携えて、神さまの命令に従いました。神さまに全幅の信頼を寄せていたのです。神さまに従うとは、まさにこういうことなのですね。

カナン地方へ来ました。カナン人が住んでいます。ところが神さまが再び現れておっしゃいました。「あなたの子孫にこの土地を与える」。既に住み着いているカナン人と、これからどう折り合いながら、自分の暮らしを確立していけば良いのでしょうか。仲良く一緒に暮らしていけるのでしょうか。そしてこの土地を、どうやって自分の土地にしていけるのでしょうか。

神さまは「あなたに」ではなくて「あなたの子孫にこの土地を与える」とおっしゃいました。直ぐにアブラハムのものにはならないのです。そうです。この土地がアブラハムの子孫イスラエルのものになるには、800年から700年ほど後の紀元前 1000 年頃、ダビデがユダヤ王朝を建てた時代です。それまでの長い年月、イスラエルの民は自分の土地を持たない寄留の民として、生きていかなければなりません。それでもアブラハムはそこに祭壇を築いて礼拝を捧げました。神さまの約束の言葉を感謝して受け入れたのでした。

どうしてでしょうか。その鍵になる言葉が祝福の源です。生まれ故郷、父の家を離れて、見ず知らずの地に出て行くという人生の大きな転機が「多くの人の祝福の源となるため」だったからです。神さまが「地上の氏族すべてをアブラハムによって祝福に入れる」というご計画を立てられたからなのです。自分のことだけ考えるならば、何も苦勞と危険が降りかかってくるような出発をする必要はありません。ハランに留まっていた方がはるかに安楽です。事実彼の父テラは最初の計画を変更して、ハランで生涯を閉じています。

人生をどう送るか——幸せな生涯を送りたいと誰しもが願います。でも幸せの内容が問題です。多くの人は、物心両面で過不足なく平穩無事に暮らせれば、それでよしとするでしょう。でもそれだけで本当に満足できるのでしょうか。人という字は互いに支えあって立っています。人を支えて共に立つ時に、初めて人になるのですから、やはり人のためになるという人生を選び取るべきなのですね。アブラハムは 75 才にして、その決断をしたのでした。

[2] 示される地

小久保富成先生は、1968 年 4 月に浦和教会の副牧師に就任されました。伝道精神旺盛な浦和教会で厳しい訓練を受け、1 年後には開拓伝道に押し出されてしまいました。1969 年 4 月に出身地の飯能と浦和の中間点川越の岸町 1 丁目のアパートの一室に居を移して礼拝を始めました。伝道の成算や自信など全くなく、穴井牧師の厳しさから半ば逃げ出したい思いもあって川越伝道を開始したと、小久保先生が語っておられました。それが小久保先生の 33 才の出発。でもその出発があったらこそ、今日の川越教会があるのです。よくぞ川越に来てくださいました。神さまのご計画、神さまのお召ですね。

私の場合は、敗戦の混乱期の中学生時代から目白ヶ丘教会に通い始め、温厚な熊野牧師夫妻のもとでゆっくり育てられ、神学校も目白から通い、卒業するとそのまま副牧師に迎えられて、高齢になられる先生にお仕えしていました。子供が2人与えられましたが、両方の両親が近くにおいて、何くれとなく助けてくれました。申し分のない境遇で、牧師修業を十分に積んで、先生が引退されたら、一本立ちさせていただこうと思っていました。ところが私の心に、主イエスから「持ち物を全部売り払って、私に従いなさい」と言われて、悲しみながら去ってしまったあの金持ちの青年の姿が浮かんで離れなくなり出したのです。貧しくならなければなりません。ゼロから出発すべく、開拓伝道に出してくださいと、牧師に願い出ました。

「よかろう」と連盟の総主事に取り次いで下さいました。しかし示されたのが札幌教会です。小さな群れとはいえ北海道の第一教会です。私の両親は北海道出身で、親戚・知人が多くいます。ゼロからの出発になりません。どうぞ暮したことのない西日本の困難な伝道地に遣わして下さいと繰り返しお願いしました。しか道は開けません。やがて「私が行けという地にどうして行かないのか」という声が響いてきました。「伝道とはお前がやりたい所で、お前のやりたいようにすることなのか。お前にゼロからでもやれる力があるのか」。「神さま、傲慢の罪をお赦し下さい。あなたが私に行けとおっしゃるご命令に、従順に従います」。やがて札幌教会から招聘状が届き、神さまからのお召しと恐れおのきなから受託して、雪の積もる町に赴任したのでした。1964年の暮、32才の新しい出発でした。

札幌生活 25年、充実した奉仕のさ中に、バプテスト宣教 100周年記念集会に参加しました。賛美歌を歌っている最中に、シンガポールへの宣教師としてお前が行きなさいという神さまの召しが心に響いてきました。「えっ、私ですか」。それまで国外伝道委員長として送り出すことが自分の役割と思い込んできたのです。札幌教会50年計画を作成中でした。しかし世界宣教も大切です。お召ならば従いますと主に答えました。札幌教会に3年繰り返し辞表を提出してやっと牧師招聘委員会が出来、5年半後にシンガポールへ赴任しました。1995年5月、63才の出発でした。

70才を過ぎました。後任者を迎えて傍から支え、さらに東南アジアの伝道の充実伸展をはかろうと願っておりましたのに、交代・帰国を命じられ、死ぬまで居て欲しいと願う国際結婚組の人たちとの板ばさみの中で、2005年正月72才の不本意な帰国となりました。すると2004年7月、未だシンガポールに在任中に、川越教会から帰国したら牧師にと招聘状をいただきました。びっくりしました。川越教会はどうして何の接点もない加藤に招聘状を下さったのでしょうか。

しかし帰国後の私の任務は、インドネシアの浅見・木村宣教師、タイの坂元宣教師辞任後の空白がいつまでも補充されない国外伝道の祈りの衰退を復活させることです。全国の巡回アピールの日々が続きますからお受け出来ませんでした。でも気になるので巡回のない日曜には川越の礼拝に出席するようにしましたら、愛甲牧師が病氣辞任となり後任者の目途がたちません。是非にということになりました。シンガポールに戻る予定でしたのに、「今は留まりなさい」とのお言葉がまた聞こえてきました。そして遂に「はい」とお答えせずにはおれなくなりました。私の思いの中には、2005

年に日本に帰国するなど、ありませんでした。また2008年以降も日本に留まることなど、ありませんでした。シンガポールに、アジアのただ中に居たかったのです。でも神さまが私に示された地は、ここ川越教会だったのでした。

[結] 神の御心に従う

少し長くなってしまいましたが、私の82年の人生のうちの牧師としての歩みで経験した、大きな転機を証しさせて頂きました。皆さんもそれぞれに、人生の歩みの上で転換を余儀なくされた経験をお持ちでしょう。聖書はこう語ります。「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する」(箴言19:21)。自分の生き方や人生設計にしましても、或いは家族のことにしても、仕事のことについても、こうしようという計画や願いがあります。でもなかなか思う通りにはならないのが人生です。イエス・キリストですら「出来ることなら十字架の死という杯は取りのけてください」と祈っておられます。「しかし、わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコ14:36)。そうです。結局は私の願うことではなく、神さまの御心に適うことが行われた方が、決定的に良いのです。アブラハムの出発は、彼の計画ではありませんでした。神さまの命令だったのでした。そして彼は神さまに全幅の信頼をよせて服従したのでした。

どうして彼は服従したのですか。見ず知らずの地に出て行く目的が「祝福の源となるため」だったからです。神さまは「祝福はアブラハムから地上のすべての人々に及んでいくように」とお考えになり、アブラハムをお召になりました。そしてアブラハムも、他の人の祝福のためにお役にたつ人生を選び取ったのでした。75才にして、彼は遂に決断したのでした。「他の人があなたによって祝福に入る」。その祝福とは、どのような祝福でしょうか。その人も周りの者も喜び感謝して命を全うできることが、本当の祝福です。私たちは、目先の小さな幸せに捉われて、先の先まで見通せません。ですからアブラハムのように、行先がはっきり分からなくても、神さまに全幅の信頼を寄せて歩み出すことが大切なのです。そしてこの地で生きよと言われたら、そこで神さまのご指示を聞き取りながら、為すべきことをして生きていけばよいのです。信仰とは、神さまから心に示された将来を、人生の歩みを通して現実のものにしていく原動力です。アブラハムは遠く700年も先の民族の祝福のために、自分の人生の旅路を一步一步進めていきました。自分にではなく、神さまに全幅の信頼を寄せて、お従いしました。信仰こそ私たちの人生の旅路を導く杖です。

お祈りします。神さま、アブラハムが人生の転機をどのように受けとめて、新しい歩みを始めたかを学ぶことが出来て有難うございました。聖書を読みますと、アブラハムも愚かな迷いや罪を繰り返しています。私たちと変わりありません。立派な聖人や英雄ではありませんでした。でも神さまのお召と導きに全幅の信頼を寄せてお従いし、見ず知らずの地で祝福の源となる新しい歩みを始めました。これは本当に偉いことです。やはり信仰の父です。神さま、どうぞ私たちにも信仰の旅路をたどらせてください。あなたが私たちをお用いになり、あなたの祝福を周りの方々にお分かちできるようにお導き下さい。イエスさまのお名前によって祈ります。アーメン